

鐵幹における星菫調の成立

——特にその現実的諸条件について——

和田 繁 二 郎

与謝野鐵幹は「東西南北」(明治二九年)「天地玄黄」(同三〇年)において、いわゆる虎剣調の詩歌を、彼の詩歌革新の實踐として示して後、まもなく「紫」(同三四年)においては、星菫調への急角度の転換を行つた。いまこの小論においては、この転換の理由を探り、同時に、その明星ロマン主義の本質を、現実的諸条件のもとに究明してみたいと思う。

鐵幹は「亡国の音」(明治二六年)によつて短歌革新の第一声を發した。そこでは「文章の世道に關せざるもの工なりと雖も何の益かあらむ」という古人の言を肯定し、また「道徳と文學とは全く別物なり云々」という言を愚論なりと否定している。これによつて明らかのように、いささか功利主義的な立場に立つとは言え、現実根ざした文學たることを、その基底にもつものであつた。この立場から、

彼は御歌所派歌人をけなしつけているのであるが、これを表現の問題に即して言う、旧派の歌は言語の遊戲であり、既成の譬喩的発想をとつており、また既成の自然美觀にとられてゐる。これらはすべて古人の模倣で、古い風流心にとられてゐるのである。いわばこれは人為を喜ぶところになり、すなわち野鄙であり卑俗であるとする。これに對して、丈夫の歌は固定した自然美觀に囚われず、精神と自然とを一致させて自然を見るところに生まれるとする。旧派が人為を愛するのに對して、自然を愛するのであり、それは即ち真に高雅なる境地であるとするのである。

これらの立場から旧派の和歌を非難するところを見ると、理想として、対象をすなおにありのままに見ようとする寫實の方向を示している。そうして、この表現の相異を、彼はそのまゝ女々しく弱々しい御歌所的人間と、大丈夫的人間との相異として考へてゐる。この人間と文學との關聯は、

彼にとつては、極めて自然な思考の赴くところであつた。

鉄幹がこの「亡国の音」を書いた後、明治二十七年七月二十七日付の小中村義象宛の書簡に

歌の巧拙を云々し、句の独立とか三句切とかを云々するは抑も末かと存候、今日は精神の改革が第一に候べし、即ち今日の人間として、万事を歌ひ、虚飾なくイツハリなく真面目に之れが余の歌也、余の思想を述べたるものと何人へも見せらるる丈の歌を詠じ申度、然るに従来の歌はすべて古人の思想となりてウソ八百を詠み出で候もののみ甚だ慨嘆の限に存候

と述べている。このように彼は精神・思想の改革を先決問題として考えていた。今日の歌をつくるには、まず今日の人間になることを主張したのである。文学の改造を人間変革の問題と不可分離のものとして考えたのである。「亡国の音」はこの新しいと自覚された人間のエネルギーによつて支えられていたのである。

ところで、鉄幹の言う新しい人間とは、以上の記述にも散見したように、大丈夫であつた。言いかえれば国士であつた。

鉄幹は勤王の志士礼敬を父にもち、尊王攘夷の思想を受けついでいた。もつとも、少年の頃から福沢諭吉・中村正直・坪内逍遙・徳富蘇峯などの文に親しんでいたし、若干

西欧諸国の翻訳書にも目をそそいでいたので、全く維新の志士そのままの思想の持主でもなかつた。ただその志士的情熱と行動性のみは、強烈に彼を動かしていたのである。

そこに、「明治二十七年五月、朝鮮問題のために、日清兩國のこやや切迫せる折の歌に」という詞書をもつ

いたづらに何をかいはむ。事はただ此太刀にありただ此太刀に。と言うような、いわゆる虎剣調の歌がつくられたり、朝鮮親日政府との合作体であつた乙未義塾に教師として赴任したりすることが行われたのであつた。また日清戦後、その勝利をうたい、かつての征韓論者南洲を偲んだ詩「祭南洲先生」の一篇もつくられたのであつた。

祭南洲先生

今はえみしを討つために

玉師十万海をこえ、

捷報しきりに耳を打つ。

天皇陛下のかしこさも、

大和男児の雄々しさも、

こたびの軍に世に知れて、

朝日とあがるわが国威。

(四十八行中、三十行より三十六行まで)

これらの作品や行動によつて見られるものは、一見、当時の国家主義の風潮にそのまま乗つたものと見られるが、

当時の藩閥官僚政府の思想や意志と全く同一のものであつたかどうか。

およそ当時の国家主義の風潮には、二つの流れがあつた。明治二十年代の日本の現実には、天皇制絶対主義の勢力による上からの近代化が、着々と推進されている時であつた。そのような状況に対応して、真に愛国的なところの、下からの国民の手による自主と自由の獲得を実現することは、不可能な状態にたち至つていた。そこで、民主主義者たちは、いわば国内の民主的な改革に失敗したあげく、条約改正、対外完全独立の獲得をもつて、専制政府に迫つた。そこに「対外強硬」「海外進出」が主張されるようになったのである。しかし、この国民的立場に出発したとは言え、国内における民主的改訂から切りはなされた対外強硬策は、所詮国民のためのものではなかつた。ところが一方、超国家主義の藩閥官僚の側では、対外強硬策は、彼らの方がむしろ本家であつたので、彼ら藩閥官僚の方へ主導権を奪いつつてしまつた。そうして今の民主主義者も、神道家もキリスト教徒も、更に国民も、その国家主義的対外政策に引きずられていつた。そこに、民主的な立場から出たはずの国民のための「対外強硬」や「海外進出」等が、天皇制の国権主義の仕業にすりかえられていく過程がのぞかれる。ここに日清戦争に突入した当時の挙国一致体制ができて上つ

たのである。(井上清「天皇制絶対主義の發展」による)

このように、当時の国家の富強を願う立場には、国民の側からのものと、天皇制による絶対主義藩閥官僚の側からのものとがあつたが、鉄幹はこの両者のどちらに傾いていたのであろうか。それはにわかには断定し難いものがあるが、およそ推測されるころは、これらの両者の国家富強策以前の、尊王攘夷的な志士的情熱を根底にして、その上に当時の国民的な立場が醸成されつつあつたものと言ふことができよう。

「東西南北」の中にうかがわれる天皇への無条件的な尊崇は、まさに尊王的立場に發せられたものと見られる。とうのは、後述のように、彼は日清戦争を通じて、また彼の理想の挫折を通じて、やがて天皇制に疑義をさしはさむに至るのであつて、そのような事実から、この「東西南北」前後においては、彼は絶対主義に担がれた天皇の性格を見ぬくことはできなかつたものと見られるのである。いわば、維新のスローガンにのぼつた理想像としての天皇——實に得ない天皇を戴いていたのである。

国民的立場に通ずるものには、彼の藩閥政府批判ないしは否定の言辭が見られる。はつきり鉄幹作とは署名されてはいないが、鉄幹の作と思われるものに、二十六年五月の新聞「日本」に載つた「あさ香社戯稿」がある。

ますらをがさつ矢のがれて鹿兒(自)物いつまで萩に立ちまじる
らむ(藩閥)

世の秋にかたふきぬらし萩の葉も色つきそめてをしかなくなり

(藩閥衰兆)

鉄なせる隼人の顔をさかはきてつくらまほしき軍艦つよ艦かな(題知ら
ず)

これらの藩閥への不信は「東西南北」の中にも見出すこと
ができる。

黒門

伏見繩手のたたかひに

錦旗一たび出でてより

順逆忽ち地をかへて

賊といふ名もあさましや。

薩摩隼人にはかられし

この恥いかで忍ぶべき。

(中略)

あたりの花に暮うちて

酒に妓楽の音たかく

夕に馬車を駆る人は

それも隼人の子なるらむ

(三十二行のうち冒頭と終節)

あるいは、先述の「亡国の音」もまた、薩州の藩閥によつて占められていた御歌所派への反撥でなかつたとは言い切

鉄幹における星畫調の成立

れない。彼の薩州への敵意というものは、父礼蔵の鹿兒島布教の際の、苦い思い出に発する個人的なものであつたかも知れないが、かなり根強く彼の心底にこびりついていたものと思われる。

「東西南北」が、出版社の予想を裏切つて、かなり多くの読者を獲得することができたというのも、この藩閥への批判的立場をもちつつ、しかも国家の發展を願うという国民的立場にあつたからであると思われる。

また半島進出に際しての韓民族に対する意識も、ただに圧迫的態度ではなかつた。ともに当時日本のおかれていた被圧迫民族としての共感の上に、自衛共存の意識のあつたことが注目される。それは、「東西南北」の「官妓白梅を悼む」という短歌の序文に描かれたところの、日本人と對等に「意氣相投ずる」人間の交渉にうかがうことができるし、「咸鏡道の山中、偶ま旧友某と遇ふ云々」の詩の

虎はふせがばふせぐべし、

北夷の害は如何にせむ。

万馬あしたに南下せば、

八道みすく血とならむ。(傍点原文)

という一節にも見出すことができる。また後述の「日本を去る歌」の中にもそれは明確に認めることができる。このような立場は、絶対主義官僚の封建的な領土欲や、帝國主

義的な植民地獲得の野望とは異なるところと言わねばならない。

鉄幹は以上のような、国民的立場に傾いた「海外進出」の意欲をもつて、自ら身をもつて朝鮮進出を行った。すなわち明治二十八年の春、乙未義塾教師として赴任して後、三十一年までに三度渡韓し、政治家として、また実業家として立とうとしている。しかしそれらは結局のところ成功するには至らなかつた。

その不成功の原因は、客観的に見て、彼のロマン的なまでの野心が、現実性をもつた計算の上に立つていなかつたことによるものであろう。それは多くの人達によつて評されるように、いわゆる山師的行為と解される一面をもつていたのである。しかし、彼の行為の原動力であり、また規範をなす主情的な判断によつては、彼の失敗は当時の政治権力、絶対主義藩閥政権の迫害によるものであつた。

この彼の現実的能動の面における挫折は、一層、当時の政治権力に対する批判を強め、さらに否定への線を明確にするようになった。それは第一回の渡韓後に早くもあらわれており、たとえば「東西南北」中の「僑居偶題」という詩の一節に、次のように歌われている。

去年の夏のこのごろよ、

われ韓山に官を得て、

謀るところも多かりし、

それも今更夢なれや、

世は慨くまじ徒らに、

小吏の怒りを買ふばかり。

この官僚への不信・批判は、三十年より三十三年までの詩歌を集めた詩歌集「鉄幹子」（三十三年刊）に一層明確な形であらわれてくる。それは戦争自体を否定し、また戦争の侵略的性格に対する批判をもそのぞかせるに至つてゐる。

血写歌（三十年十一月作）

正義とは

悪魔が被ぶる仮面にて

功名は

死をよるこぼす魔術かな

おなじ世界に生れ出でて

親もあり

妻もある子を

名をつけて

勇しき名のチャンピオン

かわいやな

いくさにやれり遙々と

見もしらず

なれもせぬ

万里の空のひとの国

(中略)

あはれやな

人を殺して涙なく

おそろしや

生血に飽きて懺悔せず

英雄と

われから誇り

豪傑と

一世を愚にす

骨を積みて

花はかざる金殿玉楼

血を塗りて

星はかゞやく勳章宝綬

あゝ百千の罪惡を

そこに一部の文明史

いたはしきかな

ちゝ母は

老いてたよりの

子にはなれ

あはれなるかな

たをやめは

二世のをつとに

鉄幹における星重調の成立

わかれつつ

いちらしきかな

乳のみ児は

また父親の

顔しらず

「忠義には猶かへがたし

あつはれ手柄したぞ」とは

あゝあゝ人を殺せよと

えせ聖人のをしへかな

この終節のところでは、彼がそれまで、大丈夫の意気のよりどころの一つとしていた天皇への忠義に対して、厳しい批判を提示している。このような戦争否定の声は、前の「東西南北」にもいささか見られるが、それは比較的風俗的に、戦死者の妻子の嘆きを歌つたにすぎなかつたが、こゝにおいては至上権力のもたらす悪としてえぐり出している。後年、彼の妻晶子によつてうたわれた「君死にたまふことなかれ」の一篇も、この「血写歌」とは全く無縁ではなかつたであろう。

彼はまたこれらの権力の支配下における社会が包蔵する俗悪さや、立身出世主義に対しても目を注いでいる。「東西南北」の「正岡子規君を訪ひて」の詩に「権貴に媚びて私利のみ、はかる詩人の多き世に」と歌い、「放魚」の詩

において「世は濁れどもその中をたどりたどらば一筋の清き真水の無からむや。」とうたつてゐる。また「鉄幹子」においては、「今様豪傑」という詩の中で、立身出世のため、に友をあざむいて恥じない男を、怒りをこめて歌つてゐる。

このような権力への不信、社会への批判を情念としてたたえつつ、彼は文学革新の仕事を続行しようとして、三十二年東京新詩社を結成し、翌三十三年「明星」を創刊した。ところが三十三年十一月号の明星誌上の裸婦像が官憲の忌諱にふれて、発禁になつた。彼は芸術文学の世界にも官憲の迫害の加わるのを身をもつて知つた。

この後、彼は有名な長詩「日本を去る歌」(紫所収)を作つてゐる。それは俗悪なる社会への不信、権力の横暴への怒りを、集大成的に盛上げたものとなつた。

日本を去る歌

ああわが国日本

ああわが父祖の国日本

東 太平洋の緑をのぞんで

白き被衣の女富士立てり

願望して低徊す

山なんぞ麗しき

水なんぞ明媚なる

ああわれ去るに忍びんや

(中略)

詩人の行動は天馬空を行く
不道德や無頼や風俗擾乱や

悪語頻りに父祖の国に誤らる

ああ人間の繩をもつてわれに強ふるか

迫害の時代に抗するは愚なり

われ遂に居るべからず

(中略)

弱きを扶けて義のある所火をも踏むは

市井の無頼長兵衛も知りたり

二十七八年の役

何んが故に父祖の子孫を殺して

高麗半島の山河

空しく北夷の蹂躪に委したる

われ之を慨して閔泳駿を擁し

微力聊か本国を警めんとす

何事ぞ偵吏われを迫害して

治安妨害の名の下

三十一年の春、南大門の雪の夕

ああ遺恨なりや、われ女装して

ひとり京城を去らざるを得ざりき

(以下略)

この長詩「日本を去る歌」には、このように彼の能動が官憲のためにはばまれるところに、その怒りの中心がおかれています、その他当時の日本の芸術・文学・宗教、あるいは道徳の「汚れ」を憂い、一方日本の武力が、おなじく植民地化の危機にあつた韓国や比利賓をよく救い得なかつたことを嘆いている。

以上のように、鉄幹は現実を批判し拒否したのであるが、彼の現実面における能動の挫折は、新しく社会と個人との乖離を思い知らせた。

三人旅（三十一年五月作）

さてもわが友辭ひざめの

眼をくろくしてつらつらに

個人ひとと社会こがの乖よこきたる

ふかきなげきを想ひみよ

あゝ泣くべきに泣きかねて

はらだたしきに打ちわらふ

はばかり多きいまの世の

よわたりこそは苦しけれ

（二十一節のうち十三・十四節）

鉄幹における個人我の自覚は、早く「亡国の音」に認められた。すなわち「小生の詩は短歌にせよ新体詩にせよ、

鉄幹における星皇調の成立

誰を崇拜するにもあらず、誰の糟粕を嘗むるものにもあらず、言はば小生の詩は、即ち小生の詩に御座候ふ」という、その序文の一節が想起される。この我の自覚は明るく肯定的であつた。それが数年ならずして、暗く否定的な我の自覚——再度の我の自覚に到達したのである。それは現実的能動の場においてではなく、その挫折の場においてもたらされた。しかしこの再度の我の自覚は、新しいロマンティズムの誕生を促した。

現実面に絶望を感じた彼の自我は、自己凝視より自己否定・自嘲、さらに悲哀への沈湎にも彼を誘つた。その詩的形象もこの心情の吐露としてあらわれはじめた。三十一年の秋、母の三週忌にあたつて歌つた「盆祭」の詩では「運命つたなき人の子は、世にさからはん力なし」「腹だたしさをやくやしきの、このわづらひを誰か知る」と言い、「十とせ誓へるますらをの願ひもあたらうちすてて」「まづしきに泣き飢に泣く、けふの我身やたゞしきか」と母の霊の前に、自己の抱負のあとかたもない壊滅をなげいている。そうして

あゝわが胸は三月月の

ゆふべの雲におほはれて

わが身は長きみだれ瀧の

水にたゞよふなげきかな

と結んでゐる。

また彼は理想と現実と、さらに肉体の青春とに分裂してゆく混迷を次のように歌つた。

われ男の子意気の子名の子つるぎの子詩の子恋の子あゝもだえの子

夢は恋におもひは国に身は塵にさても二十とせさびしさをいはず

そや理想こや運命の別れ路に白きすみれをあはれと泣く身

しかし彼はこの悲哀や混迷に泣くのみではなく、現実において獲得できぬ理想境を、精神の面において実現し創造しようとした。ここにおいて彼は、日本近代詩歌の上に、全く新しい統一体をつけ加えるに至つたのである。言うまでもなく、それが明星派の詩歌であつた。この明星調成立への過程を物語るものに次のような作品がある。

暮 鐘 (三十三年六月作)

ゆふべお茶の水の橋に立つ

車多し人多し塵多し

揚々たるは誰が子

感々たるは誰が子

一味の慈悲を神に責むな

聞けニコライの鐘人を咀ふ

(中略)

これと思ひ彼を思へば心冷えて

悄たる我影涙おちぬ

仰ぐよ瘦せし手額にあてゝ

明星かしこに独りあかき

我に珠玉の歌はなきも

翼あらばいで地を揮つて

いなんを彼空あゝあゝ高し

(四節のうち冒頭と終節)

右の中略のところでは、人々が恋や名譽や富のために東奔西走し、やがて暗い運命に沈んでゆくことを嘆き、さらに世に聖賢の居り難いことを嘆いている。そうしてこの現実に涙することから、暗鬱なる薄暮の空にも、なお高く輝いている明星に心をよせているのである。明星は彼の精神の糧であり、また許されたる唯一の可能であつた。この精神の世界に理想を実現しようとしたところに明星詩歌の本質があつたのである。

おおよそ現実から遊離したと見られる明星ロマンティズムの詩歌は、その創始者の一人鉄幹に関する限り、以上のような現実的能動の挫折と批判的精神の働哭上に打建てられたものであつた。

小論は昭和二十九年七月の立命館大学夏期日本文学講座において「新詩社の文学」と題して話したものの要旨である。